

良寛詩における中国古典の受容と独自性の

一端に就いて

程 建 敏

Abstract

This is a study of poems in Chinese made by Ryokan (1758~1831). Ryokan wrote more than seven hundred poems in his life and most of them are influenced by Chinese classics. This study compared his poems with *The poetry of Han Shan* and *Gems of Chinese Verse*. It becomes clear that similar to *The poetry of Han Shan*, the poetry of Ryokan pays more attention to the expression of thought rather than form. And in subject content, it is deeply influenced by *Gems of Chinese Verse*.

This study also analyzed the differences between the poetry of Ryokan and Chinese classics. Under the reclusive thought of "Buddhist practice", the poetry written by Ryokan in his last years is full of the artistic conception of "Zen".

キーワード……良寛 漢詩 受容 独自性 隠逸

一、せうくわん

日本における中国文学受容の歴史を概観すると、影響を大きく受けたのは江戸時代であった。当時、文人と呼ばれたのは、中国の詩書画の教養を身に付けた人物であり、武士・商人・農民といった身分や出身とは無関係であった。新潟のような地方でも、江戸時代には多くの文人を輩出した。彼らは中国の古典を受容する一方、少なからず独自の文学風景も築いた。その具体的な様相を、当時の新潟を代表する文人・良寛の漢詩に即して考察する。

良寛は宝暦八年（一七五八）越後国出雲崎（現新潟県三島郡出雲崎町）の名主・橘屋に生まれた。江戸時代後期の詩人・歌人であり、また書の世界でも独自の味わいを残した。十三歳から儒学者の大森子陽が開いた漢学塾に通い、中国の古典を五年間学んでいたため、良寛の漢詩には中国古典の受容が自ずと見られる。従来の研究でも、良寛の漢詩について様々な視点から考察が行われてきた。数例を挙げる。

鈴木文台は、「師に必ず伝うべきもの三あり、而して道徳はこれに与らず、寒山拾得の詩、懷素高閑の書、師は皆之を兼ね有す、而して加うるに和歌万葉を随とさざるを以てす」(原漢文)⁽¹⁾と、良寛の漢詩に寒山拾得の詩の韻致があることを指摘している。また、「四声の論は永明に起り、梁・陳の間に定まる。師のもっとも喜ばざるところなり。故に師の詩にはこれなし。押韻は全て古韻を用いず、文選に規則す。これは別に論ずべし、近世の詩を以てこれを律する勿れ」(原漢文)⁽²⁾と、良寛は近代詩の作法上、規則的な四声の論議をするのが嫌いで、漢詩を作るときに古韻を

用いないことを述べている。

東郷豊治『全釈良寛詩集』では、「従来の詩集には分類が全くなされておらず、ただ寄せ集めつばなしか、分類されていても、せいぜい五言と七言とに区分したにとどまり、内容が入り乱れている」⁽³⁾と指摘し、良寛の人生観・社会観・交友観などや生活ぶりがより如実にうかがえるように、良寛の漢詩を十項目に分類して通釈している。

飯田利行『良寛詩集譯』では、今まで出ている多くの良寛詩集の著者は「坐禅したことのない」、「正法眼蔵九十五卷、永平広録十卷も読んだことのない」、「漢文の常識（語法、押韻法、成語法、故事熟語）を心得ていない」ものであると指摘し⁽⁴⁾、曹洞禅の視点から良寛詩を解説している。

渡辺秀英『良寛詩集』では、「生活の諷詠が主となるだけに、宗教人として当時の宗教界を描き、また批判し、その本質論にもふれている。…山間にかくれ、田園を托鉢しての花鳥諷詠的のものがこれにつき、辺境の地で文人が少なかつただけに唱和詩は数も少ない」⁽⁵⁾と述べ、関係各地を調査しながら考察を行っている。また、内山知也、谷川敏朗、松本市壽『定本 良寛全集 第一巻 詩集』では、「良寛の詩句は『文選』はじめ『唐詩選』『詩経』『白氏文集』『聯珠詩格』『三体詩』『詩人玉屑』などに拠っている。陶淵明から、唐代の李白、杜甫、そして白居易の影響も大きい」⁽⁶⁾と良寛の漢詩中、中国古典の拠りどころを大まかにまとめている。

本稿では、上記の鈴木と内山、谷川、松本三氏の研究成果を主に踏まえ、良寛の漢詩における中国古典の受容を具体的に指摘、分析する。その上で、良寛の詩における独自性の有無について、中日文化及び思想を比較する視点から論述を試みたい。

二、良寛詩における中国古典の受容

(一) 良寛詩における『寒山詩』の受容

先行研究に指摘されるように、幅広い中国の古典と良寛詩との関連性が見出されるが、本稿では特に良寛が愛読したとされる『寒山詩』と『唐詩選』に注目したい。まず、良寛詩における『寒山詩』の受容を考察する。

『寒山詩』とは中国唐代天台山に隠れ住んだとされる寒山子の詩に、拾得と豊干の詩を合わせた詩集である。『太平広記』巻五十五の「寒山子」によると、天台の翠屏山に隠居する寒山子は、詩を作ることを嗜み、一篇一句を得るごとに、木や石に題した。これらの詩は好事家によって集められ、およそ三百余首が数えられる。内容の多くは山林幽隱者の興を述べ、または世態を風刺し、流俗を戒めるものが目につく。

後の延久四（一〇七二）年、中国天台山を巡礼した日本の僧である成尋（一〇一〜一〇八一）は、国清寺で『寒山子詩一帖』を手に入れ、翌年に頼縁らに託して日本に送った。これが契機となつて、『寒山詩』は日本に拡がるようになったという。流布した

一証として江戸時代になると、既に何種類かの刊本があった。良寛がその中のどれを読んだかは分からないが、『寒山詩』を愛読していたことが次の漢詩を読めば分かる。

終日乞食罷 帰來掩柴扉
炉燒帶葉枝 口吟寒山詩
西風吹夜雨 颯颯灑茅茨
時即伸足臥 何思又何疑

『定本・一・152』

現代語に訳してみる。

一日托鉢をし終われば、草庵に帰り柴門を閉める。いろいろにはまだ葉のついた枝を焼べながら、寒山詩を吟じてみる。秋の風が夜の雨に交じって吹き、ばらばらっと屋根を叩いている。こんな時には足を伸ばして横になり、何も考えようとせずのんびりと過ごすのだ。

内容から見ると、これは良寛が自分の草庵暮らしを記述したものである。全体的に、炉を囲んで『寒山詩』を読む生活への満足感が現れている。『寒山詩』の読書以外は何もすることがなかったかの如く、周辺には自然の草木と質素な佇まいが感じられるのみである。

また、良寛は九州の禅僧・福岡牛瑞が描いた「拾得図」(7)に七

言二句の賛を付した作品一点や、秋田からの来越画人・三森九木が描いた「寒山拾得図」(8)に賛を入れた作品二点を残している。ここでは、『良寛 その風土と周辺の人たち』に収録されている「良寛賛 三森九木画 寒山拾得」(9)を紹介する。

「良寛賛 三森九木画 寒山拾得」新潟市個人蔵



本作には、画作をした九木の署名に「壬申季秋」と制作年が付記してあり、これは文化九年(一八一二)に当たる。良寛は五十四歳、この時まで「拾得手中箒」で始まる画賛の詩文は作られていたことになる。可能性として二人が邂逅し、何を画題として合作を行うか思案したところ、良寛の方が既に作られていた「拾得手中箒」の詩を思い出し、人物画を得意とする九木にまず寒山拾得図の制作を提案したものと思われる。絵画の余白と良寛の詩賛の長さを見比べてみると、合作の前にテーマが決められていた

ことが推測される。なお、図に付記する詩の内容と大意は次の通りである。

拾得手中箒 拂顛塵埃

轉拂轉生 寒山授持經

終年讀不盡 古兮今兮

無人善買 天台山中長爲滯貨

畢竟作麼生

待當來下生弥勒判斷

拾得は手に持っている箒で、頭の上のほこりを払うが、払えば払うほどほこりが出てくる。寒山は手に持っている経文を、一年中読んでいても読み終わらない。昔も今も、二人をよく認めてくれる人は出ていない。だから、天台山の中に長く滞在し、世に知られていない。結局彼らは如何なる人物なのか、後の世に現れる弥勒菩薩のご判断を待つことにしよう。

このように一年中、箒を手にする拾得と経文を手にする寒山。世間に変人と思われていたが、良寛は彼らの才能が弥勒菩薩にしか分からない、と両者を特別に評価した。

では、良寛の漢詩はどのような点で『寒山詩』に影響を受けているのであろうか。これについて、東郷は次のように述べている(10)。

寒山の詞華を無遠慮に自作に容れて、かれは恬然としている。

たとえば、五言詩の起句の部分だけを比らべてみても、寒山に「我世間の人を見るに、茫々として路塵を走る」があるに對し、良寛に「我れ世間の人を見るに、総じて愛欲の爲めに籌る」がある。寒山に「我れ出家の人を見るに、出家の学に入らず」があるのに對し、良寛に「我れ行脚の僧を見るに、都て是れ可怜生」がある。寒山に「人浮世の中に生まれ、箇箇富貴を願う」とあるのに對し、良寛に「人浮世の間に生まれる、忽として陌上の塵の如す」がある。寒山に「余天台に來たつてより、凡そ幾万回をか経たる」とあるのに對し、良寛に「我れ此地に來たつてより、將來せし時を記さず」がある。

使用語彙の共通性を多く指摘しているのである。起句に多用していることから、まず『寒山詩』がヒントになり、あるいは『寒山詩』に着想を得てそこから自らの詩作の気分を繰り広げ、ある種の旋律としていたのであろう。

しかし、良寛の漢詩には詩句の転用だけではなく、思想的な面でも『寒山詩』の受容が見られることを次に指摘したい。

一般に『寒山詩』は、勸戒の内容や平易な言葉遣いのため、長い間、詩と見なされなかった節がある。また、韻律を厳守しないことも当時の人たちに嘲笑われていた。ところが寒山子本人は、詩の形式にこだわる人たちが作る詩は「盲徒咏日（目の不自由な人が日を詠む）」のようであると、かえって彼らを批判する。

有箇王秀才 笑我詩多失
云不識蜂腰 仍不会鶴膝
平側不解壓 凡言取次出
我笑你作詩 如盲徒詠日

〔寒山詩・二八一〕

秀才（科挙に応じる者）の一人・王氏が、私の詩に間違いが多いのを笑った。平仄押韻を知らず、平凡な語がひよいひよいと出てくるままに並んでいると指摘した。一方、私はあなたの詩の作り方がおもしろくて、目の不自由な人が太陽を詩に詠んでいるようなものだと思っている。

この詩意は、日常の実社会を率直に詠もうとせず、単に型を重んじる一般の風潮を嘆いたのである。

良寛も寒山と同様、形にこだわる詩が嫌いである。「良寛道人略伝」では、「貧道の嗜まざるところのもの三あり、曰く、詩人の詩、書家の書、庖人の饌これなり」（原漢文）⁽¹¹⁾と記述する。要するに、良寛は常識の枠にとらわれ、むやみに人に追隨するのを嫌ったのである。自作の漢詩の中にも、詩として大切なのは形式ではなく、作者の各々の性情による自由な取り組みであると記述している。

可憐好丈夫 閑居好題詩

古風凝漢魏 近体唐作師
斐然其莫章 加之以新奇
不写心中物 雖多復何為

〔定本・一・558〕

達者な詩人たちは、閑居してはよく詩を作る。古詩は漢魏の詩風をまね、近代詩は唐詩を手本にする。美しく見せるように詩句を工夫し、その上に新しさと珍しさを付け加えようとしている。しかし、心の中の思いを写し出すのでなければ、見かけ上の新奇をどんなに多く作ったとしても、どうなるものでもない。

江戸時代の日本で行われていた漢詩は、中国唐時代に確立した五言・七言の近代詩および古体詩が主であり、厳密な定型・押韻・平仄の技巧が求められたという⁽¹²⁾。しかし、上述の詩が述べるように、良寛は「心中の物を写さずんば、多しと雖も復た何をか為さん」と主張する。これは先の寒山詩の趣旨を得た表現といえよう。重ねて記すが、大切なのは形式や外見ではなく、内面性の充実、個の発露であると良寛は考えていた。

（二）良寛詩における『唐詩選』の受容

次に『唐詩選』に視点を移す。これは中国明朝の李攀竜が盛唐時代の漢詩から厳選して編纂した書籍であり、杜甫、李白、王維などの詩が多く掲載される。日本では、江戸時代中期の儒学者――

荻生徂徠に高く評価され、全国に拡がっていった。十三歳の時に大森子陽の漢学塾に入って『唐詩選』を習った良寛は、杜甫や李白などの詩を愛読し、彼らを自らの詩の題材として読み込んだ。二詩を紹介する。

「題杜甫子美像」

憐花迷柳浣花溪 馬上幾回醉戲諱

夢中尚猶在左省 諫草草筆且削

『定本・一・752』

官を辞し閑居先の浣花溪で花を愛し柳を賞で、馬に乗りながら酒を飲み、たびたび酔っておどけていた杜甫。夢の中では、まだ左省（唐代皇帝の詔勅を審議する機関）に身を置いているような気分であり、天子を諫める文章の下書きを書き終えた後でも、また文を書き加えたり削ったり精勤しているのである。既に役職を解かれているのに、おかしなことだ。

「李白賛」

東風踏青龍 閑倚案頭眠

主人供筆硯 為題醉青蓮

『定本・一・751』

春の風に誘われ、野遊びに出かけて疲れてしまい、静かに机の

上に伏せ眠っていた。そこへ、この家の主人が筆と硯をさし出して、李白の絵に賛をせよと私に頼んできた。そのため、酒を愛した李白についての詩を詠んで贈った。

盛唐に生まれ育った杜甫（七一二～七七〇）は、若い頃に経世済民の壮志を抱いたが、思うようには実現できず、長年の間流浪歲月を送った。安史の乱⁽¹³⁾の後、ようやく左省という名誉な官職に就いたが、在任中皇帝（肅宗）を厳しく諫め、怒りを買ったことから、わずか数ヶ月でその職を辞することになってしまった。

その後、成都郊外の浣花溪に移住した。ここは煩わしい町の中心から離れた、柳や竹林に囲まれる閑静な田園地帯であった。「清江一曲、村を抱いて流れ。長夏江村、事に幽かなり」（原漢文）⁽¹⁴⁾、清らかな浣花溪のほとりにのんびり過ごしたように見える数年間であったが、杜甫は内心、常に苦しい生活を強いられている庶民に心を寄せていた。官吏の目線から民衆の暮らしを見つめ続け、国体の行末を案じていたのである。

一方、杜甫と並ぶ盛唐の詩人・李白（七〇二～七六二）は、酒を一斗（多量の酒のたとえ）飲む間に詩を百篇作るといわれ、「酒中仙」⁽¹⁵⁾と呼ばれる異色の詩人である。

そこで改めて良寛の二詩を注視してみると、「杜甫子美像に題す」に綴られた憂国の杜甫像と、「李白に賛す」に綴られた酒酔いの李白、いずれも一般に中国で語られる両者の性格と符合する。良寛は、杜甫や李白の本質をよく知っていた。その上で、自作の詩の

題材に詠み込んでいるのである。不思議なことに、にわかを取って付けた如き知見ではなく、詩に詠まれた中国詩人の人物像は、伝わるころの良寛自身の立ち居ふるまいと重なり合っている。もう一例を示す。良寛の「峨眉山下橋杭に題す」詩は、李白の「峨眉山月の歌」詩に思いを巡らせ、詠んだものであるという。

「題峨眉山下橋杭」

不知落成何年代 書法適美且清新
分明我眉山下橋 流寄日本宮川浜

〔定本・一・652〕

この橋がいつ出来たのか分からないが、橋の杭に刻まれている文字の書法は強く美しいし、さわやかで新しさがある。これらの文字を読むと、中国の峨眉山のふもとの橋の杭がはるばると日本の宮川の浜に流れついたことが明白になろう。

『北越雪譜』⁽¹⁶⁾によると、文政八年（一八二五）十二月、刈羽郡越後椎谷（現在新潟県柏崎市）の海辺に一本の木が漂着した。ある漁民が発見し、薪にしようと思つて拾つて家に帰つた。乾かすために庇に立て掛けておいたところ、文字が読める好事家を通りかかり、ただの木ではないと注目した。「峨眉山下橋（原文は異体字を書いている）」という五つの大きな字が彫つてあるので、唐土から流れてきたことに気づき、漁民に別の薪を与えて譲り受け

たということである。

当時、『唐詩選』に収められている李白の「峨眉山月の歌」によつて、峨眉山の名はずでに知識人の間に知られていた。

「峨眉山月歌」

峨眉山月半輪秋 影入平羌江水流
夜發清溪向三峽 思君不見下渝州

〔唐詩選 下〕

四川省成都の西南に聳える峨眉山は、古来より中国の名山である。二つの峰が向かい合い、その形は美しい眉のように映るところから名付けられたという。二句目の「平羌江」は、峨眉山の北側を流れる青衣江の古い呼び名である。三句目の「清溪」は、平羌江が岷江と合流する地点の少し下流である。「三峽」は、長江流域にある三つの險所、瞿塘峽・巫峽・西陵峽の総称である。また結句の「渝州」は、現在の四川省重慶である。本詩は、李白が二十代の頃、故郷の峨眉山のふもとから長江を下る旅に出た時、山上の月に向かって詠んだ作であると推定されている。

ところ変わつて良寛の生きた時代、学問を究める刈羽郡祐光寺の僧勸励は、流れ着いた橋柱の字を籠字にして同好の士に送り、所縁の吟詠を請うた。この求めに応じた良寛は、「峨眉山月、半輪の秋。影は平羌江水に入りて流る」と、憧れの詩仙李白が綴つた峨眉山の姿を想像し、あたかも中国文化と直接出会つたような気

持ちで本詩を作ったのだろう。

さらに、内山知也によれば、「良寛は李白の『陽花落ち尽くして子規啼く』の句を応用したり、『贈汪倫』の詩の一部を書き記したりしている。また内容的にも、『山中問答』の詩などにかなり近いものが見られる」⁽¹⁷⁾と述べている。

三、良寛詩における独自性の一端について

(一) 良寛の隠逸思想について―中日比較の視点から―

上述のように、良寛の漢詩には中国古典の受容が見られることは確かである。しかし興味深いのは、このように中国の影響を大きく受けた良寛がなぜ「日本の真髄を伝えた」⁽¹⁸⁾詩僧、あるいは「もつとも日本人らしい日本人」⁽¹⁹⁾と評価されているのか。それは良寛の漢詩には、決して単なる中国古典の模倣にとどまらず、撰取した先にむしろ大きな独自性が存在するからであろう。多様な方面で余人に代え難い評価が寄せられる良寛の、その独自性の解明は簡単に出来るものではないが、引き続き良寛の詩作を中国文学と比較検討しながら、部分的解明に努めたい。

まず端緒として、良寛が生きた時代背景に触れつつ、思想の特質に言及する。

良寛は宝暦八年（一七五八）に生まれ、天保二年（一八三一）に没している。江戸時代中期の後半から後期の前半に相当し、江戸文化の全盛期にあたる⁽²⁰⁾。それを支えた当時の文人の特徴に

ついて、揖斐高は『江戸の文人サロン 知識人と芸術家たち』の中で、次の四つにまとめている。「①読書人であり、高度の知識人である。②重大な政治権力の行使に直接的には関わらない。③詩文書画など古典的な文学・芸術に堪能で、かつ多芸多才である。④世俗的な価値基準より自己の内面的な精神生活の充実を重視し、反俗的・隠逸的・尚古的な姿勢を示す」⁽²¹⁾。冒頭「文人」の呼称について定義付けをせず記述してきたが、揖斐氏の研究成果を傾聴しつつ、これを紹介したい。ここで特に注目したいのは、④における隠逸的姿勢である。

『漢書』には、「吏治行に茂異有り、民に隠逸あり」（原漢文）⁽²²⁾との記述があり、これが「隠逸」という語句に関するもつとも古い文献だとされている。日本人の研究では、神楽岡昌俊の分析に、「隠逸思想は中国思想にあつて反体制の思想であり、異端の思想である。しかも乱世の思想である。中国の思想にあつては、儒家思想が主流をなし、その思想の中心は政治思想である。社会のあり方、政治のあり方と関連をもつのである。それに対し、隠逸は現実の政治に背を向けた人々である。政治から逃避し、また政治を超越した人々である。隠逸はこのように体制からはずれた者である」⁽²³⁾と記す。

そもそも日本には、隠逸の伝統がなかった。田云明の研究によると、日本においては、「隠者という存在は主に中国から請来された文学作品によって知られることとなったという。実際の隠者は『懐風藻』の詩人・帰化人系の隠士民黒人が挙げられるくらいで、

ほとんど皆無に等しい。こうした状況の中で、仏教修行の僧侶が
隠逸志向を詩作に読み込むことは、当時の僧侶が隠者という觀念
上の存在と同一視される契機となった⁽²⁴⁾と記す。

つまり世俗から離れ仏道に励む僧侶の実生活と、そこから生み
出された詩作に、中国から伝わった隠逸思想が徐々に浸透し、日
本の修行僧のあるべき姿と重ね合わせられるようになっていく。

その結果、両国の隠逸思想には自ずと差異が生じた。神樂岡昌
俊、田云明両氏の記述の要点をまとめてみると、中国では古来、
隠逸は官吏の生き様への憧憬を抱きながらもわけあって、一般民
衆の中に身を投じた人々の行為に関わるものとなる。そのような
経緯で隠逸は日本では、政治や為政者と絡むことなく、ひたすら
仏道修行における重要な思想的背景になったわけである。こうし
てはじめ『漢書』の記述にあった「民」が、日本においては僧侶
によって代表されるようになった。

続いて、良寛の出家動機を改めて確認してみたい。彼は安永四
年(十八歳)、尼瀬の光照寺の玄乗破了に従い剃髪し、後、円通寺、
照明寺、五合庵などに移り住み、生涯一瓶一鉢の修行生活を送り、
一定量の詩書を残した。その詩作の中に、隠逸志向につながる告
白が見られる。例として二詩を挙げる。

少小抛筆硯 窃慕出世人
一瓶与一鉢 遊方凡幾春
帰来絶嶺下 静卜草堂貧

聴鳥充絃歌 瞻雲為比隣
崖下有清泉 可以濯衣巾
嶺上有松柏 可以給採薪
優遊又優遊 薄言永今晨

〔定本・一・11〕

若い頃学問をやめ、ひそかに僧侶になる人に憧れていた。その
後出家が叶い、一瓶一鉢を携え、何年間も諸国行脚の生活を過
していた。故郷へ帰って険しい国上山に入り、静かな草堂で清貧
の暮らしをしている。鳥のさえずる声を琴の音と聞き、空に浮か
ぶ雲を親しい隣人と見なす。崖の下には清らかな泉があり、衣服
などを濯げる。山の上には松や柏があり、薪になってくれる。こ
の悠々とした思いのままの生活を、今朝も、そしてこれからも長
く続けたいものだ。

「少小筆硯を抛ち、窃かに出世の人を慕ふ」と記す冒頭の二句
によると、良寛は俗世間から身を離したい願望をよほど早くから
抱いていたことが分かる。次に「一瓶と一鉢と、遊方すること凡
そ幾春ぞ」や「崖下に清泉あり、以て衣巾を濯ふ可し。嶺上に松
柏、以て採薪に給す可し」の詩句は、無為自然に基づく良寛の修
行生活を描く。ここには人影は全く見られず、ただ居るのは良寛
一人である。名主の長男に生まれ周囲を官吏に監視されていた境
遇下、政治を嘆き反体制を唱えることなく、天然の草木に身を委

ねた。鳥、清泉、松柏を相手に日々を送ったことが詩作に綴られている。

「聞之則物故 二首」

人生百年内	汎若中流船
有縁非無因	誰置心其辺
昔与二三子	翱翔狭河間
以文恒会友	優遊云極年
何況吾与子	嘗遊先生門
行則並車騎	止則同茵筵
風波一失処	彼此如天淵
子抽青雲志	我是慕金仙

（後略）

『定本・一・375』

人生百年のうち、川の中に浮び漂っている舟のようだ。日頃諸々の出来事は皆、因縁あつてのことだが、誰もこれを心にとどめようとはしない。昔を振り返ってみると、二、三人の友人と、塾のあつた狭川のあたりを走りまわっていた。いつも詩文を持ち寄つて語り合い、悠々と学年を重ねたものだった。まして君と私は、かつて大森子陽先生の門に入った学友だ。塾へ行くときは一緒に乗物を並べ、食事も宿泊も一緒にとつたものだった。ところが、世の変遷でいつしか子陽先生の塾を離れ、私たちの運命も、天と淵ほど隔たつてしまった。君は青雲の志を抱き、私は金仙の

世界に一層懂れるようになっていた。

詩の内容から、これを捧げた之則は良寛と一緒に大森子陽の漢学塾に入った学友であることが分かる。内山知也によると、「之則は後に江戸で儒学を深め、三春藩の儒官にまで出世したが、志半ばで文化九年（一八一二）壬申九月六日に死亡した。久しく交流のとだえていた親友の死を教えられ、良寛は慟哭して二首の詩を作った」⁽²⁵⁾という。

本詩の中で、良寛は「子は青雲の志を抽んで、我は是れ金仙を慕ふ」と、之則と自分が漢学塾にいた時に目指した人生進路を追憶した。良寛が懂れたのは、一体如何なる世界であつたものか。ここで、キーワードとなる「金仙」の意味に言及する。

「金仙」とはそもそも中国道教の用語であり、後世徐々に仏教用語としての意味合いが広まったとされる。李白詩「興元丹丘方城寺談玄作」には「朗悟す前後の際、始めて知る金仙の妙。幸いに禅居の人に会い、玉を酌んで坐ろに相召す」^(原漢文)⁽²⁶⁾の二句があり、親友・元丹丘と禅仏の思想を話したことを綴っている。王琦著『李太白集注』によると、「金仙謂佛」⁽²⁷⁾とあり、「金仙」は仏そのものを指す。即ち、之則が抱いた「青雲の志」と対極にある良寛の「金仙を慕ふ」の念は、中国に端を発する用語で、仏教の世界への懂れを示しているのである。

唐代の文人の例として、寒山子も天台山に一人こもつたことがある。つまり隠逸的姿勢を取つたのである。寒山子が生きていた

唐代では、科挙が始まり、試験に合格する優秀な人材は、官僚に成りうる時代であった。重大な政治権力にはほとんど関わらない江戸時代の文人と違い、中国唐代の文人はほとんどが儒学の教養を積むことにより、その活用の術として治世を行う抱負を持った。寒山子も例外ではなかったのだが、結局科挙には合格できず、文官を目指すという夢を実現できなかった。寒山子はこのことを詩の中にも読み込んでいる。

雍容美少年 博覽諸經史

尽号曰先生 皆稱為學士

未能得官職 不解乘耒耜

冬披破布衫 蓋是書誤己

〔寒山詩・二二八〕

ここに、一人の気品ある美少年がおり、様々な典籍を精読していた。人々に先生と呼ばれ、また学士と尊敬されていた。しかし未だに官職につけず、他方、鋤鋤を手にして畑の仕事もできない。そのためにも冬でも破れた服を着ている。おそらくは学問が身を誤らせたものだろう。

簡是何措大 時來省南院

年可三十余 曾經四五選

囊里無青蚨 筐中有黃絹

行到食店前 不敢暫回面

〔寒山詩・一一九〕

これはなんと貧乏な学生だ。試験の結果をうかがうためによく南院（官吏の移動などが揭示される所）の揭示を見にやってくるが……。およそ年齢は三十を過ぎていようか。これまでに四、五回の科挙試験を受けている。財布の中に金銭はないが、笈の中には書物がぎっしり。腹が空いて飯屋の前にやってきても、成功者になれなかった己の姿をさらすのが恥ずかしくて、店に入る勇氣はないのだ。

このように、何回も科挙に落ちた寒山子は、やがて失望して隠居することにしたのであろう。また、同じ唐代の李白は終南山、徂徠山、廬山に隠居したことがあるが、いずれも政治的仕官を志して、破れた挙句の行為であった。先に引用した通り、憧れであったものの現実の政治に背を向けた、中国の隠逸の姿勢の典型が見えてくる。

以上分析してみると、「二瓶一鉢」の修行生活を実践し、仏教の世界に憧れることで隠逸を選んだ良寛と、出仕の願望が叶わず実社会に失望して隠逸を選ぶ寒山子や李白など多くの中国文人との間では、その隠逸思想形成の動機に違いが見られる。この点に関しては、中日出仕制度の違いなど、さらに社会背景を重ね考察を継続したい。

(二) 良寛の「草庵雪夜作」について—李白の「臨路歌」と比較しながら—

詩は心の思いを吟詠する。最期を迎えるときに読まれる漢詩は、より詩人の心に迫るものだと考えられる。良寛の漢詩にも終焉期の思想を暗示する特徴が現れる。次に、最晩年に作られた「草庵雪夜作」を取り上げ、同じく李白の晩年作「臨路歌」と比較しながら、良寛詩の辿りついた「金仙」の世界を垣間見たい。

まずは李白詩だが、題名の「臨路歌」については「臨終歌」とすべきものが、後世誤って「路」字に置き換えられたものである。李華「故翰林學士李君墓誌」⁽²⁸⁾によれば、李白は死に臨んで「臨終歌」を作ったとされる。ゆえに、「臨路歌」とは李白辞世の詩と捉えられる。

「臨路歌」

大鵬飛兮振八裔 中天摧兮力不濟

余風激兮萬世 遊扶桑兮挂石袂

後人得之傳此 仲尼亡兮誰為出涕

〔李白全集・三・一二三〇〕

大鵬は舞い上がり、八方の果てまで翼を振るって飛んだが、残念ながら途中でできてしまい、力が続かなかった。その大いなる志が宿った風のみが、後世までも吹き渡るだろう。途中、扶桑

（中国の伝説で東方の果てにある巨木）のあたりまで飛んだ時に、左の袂を引っ掛けてしまったのだが、後世の人はこの袂を見て大鵬の志を言い伝えてくれると思いたい。しかし、現実的には私を認めてくれる孔子のような見識ある人はそういない。誰が涙を流してくれるだろうか。

大鵬とは、中国の伝説における巨大な鳥である。『莊子』逍遙遊篇に、鵬が以下のように描かれている⁽²⁹⁾。

北の果ての暗い海に住んでいる鯤という魚がいる。鯤の大きさは、幾千里ともはかり知ることができない。やがて化身して鳥となり、その名を鵬という。鵬の背の広さは、これも幾千里あるのかはかり知れぬほどである。ひとたびふるいたって羽ばたけば、その翼は天空にたれこめる曇と区別がつかないほどである。この鳥は、やがて大海が嵐に湧きかえるとみるや、南の果ての暗い海を目指して移ろうとする。

李白は若い頃、別に「大鵬賦」⁽³⁰⁾を吟詠し、自らを大鵬になぞらえた。本詩の素地にはこれがある。李白は四十二歳の時、唐王朝の玄宗皇帝から直々に招かれ、翰林供奉（天子側近の顧問役）を務めていた。本詩に「大鵬飛びて八裔に振るふ」と綴っているのは、まさにこの時であろう。大臣まで上りつめようと思ったが、結局望みどおりにはいかず、わずか二年間で都を追われてしまっ

た。「空の途中で摧かれて力済ひえず」と綴るのは、この都を追われたことだと考えられる。仕途が叶わず失意した李白は、その後放浪の生活を続け、諸方を遊歴したり、廬山などに隠居したりした。いまわのきわに、「余風は万世に激す、扶桑に遊びて左袂を掛く」と、壮大な志を發揮できず頓挫した嘆きを表した。詩の全体には、彼が辿ってきた栄枯盛衰の実感が漂っている。

一方、良寛の「草庵雪夜作」を見てみよう。

「草庵雪夜作」

回首七十有餘年 人間是非飽看破

往来跡幽深夜雪 一炷線香古勿下

〔定本・一・642〕

人生を振り返ってみると、いつしかすでに七十年あまりが過ぎってしまった。思えば世間の善し悪しを飽きるほどまでも見抜いてきた。静かに外を見れば、行き来する道も深夜の雪に埋もれて隠れてしまいそうである。ただ一本の線香だけが、古びた窓の下で揺らめいている。

ここにも人影はない。寄り添ってくれるのは、草庵の片隅にあるただ一炷の線香のみである。山間に隠れ、友人と対談、対酌する多くの中国の隠者と違い、良寛はこのように孤独に徹した隠者の一人である。詩歌の中には、女、子どもといった社会的弱者とたわむれ、心弾ませる動向を詠んだものもある。比べて本詩には

七十四歳で没した生涯において、少なくとも七十を過ぎ心身ともに余計な世事がそげ落ちた頃の、率直な内面が吐露されていると見たい。

また、良寛は年齢上重要な節目に、「首を回せば二十年」⁽³¹⁾、「五十有餘年」⁽³²⁾、「七十有餘年」のように、既往を回想してその時々的心境を詩に書き込むことを好んだ。「草庵雪夜作」はその幾首かにおける、悼尾の作に当たる。五十歳余りの時に書いた「是非得失、一夢の中」⁽³³⁾と同様、本詩は「人間の是非、看破に飽く」と、今日に至った曲折の過去を一言のみで簡潔に表現した。李白が「臨路歌」で述べる波瀾万丈の人生と違い、良寛は現実社会の事柄を何も語っていない。ただ、「是非」で判断されがちな世界を超越する、禅僧としての本来の性から感じた思いが込められているのみである。

良寛の用いた言辞中、「往来の跡、幽かなり」について触れてみる。「跡」と「幽」は、『寒山詩』中の「鳥道、人跡を絶つ」⁽³⁴⁾や「白雲、幽石を抱く」⁽³⁵⁾を想起させる。中国では、隠居して仕官しないことを「幽居」と呼び、これまで言及してきた隠逸に近い意味がある。「幽石」とは、寒山子が隠居した奥深い山々にある石だが、自分の身の回りにはこれぐらいいしかなないという物質的欲望から解放された暮らしぶりを語っている。ここで寒山子が綴るのは、「山中の幽」である。

一方、良寛の詩に綴るのは「雪夜の幽」で、その生活空間は中国文学に見られる内容と比べ、限定的で、屋外との交じわりが遮

断されたイメージが強い。

先の李白詩と比べても、大鵬の詩句を用いた雄大なスケールの動感がうかがえたのに対し、良寛の「草庵雪夜作」はより静かで、あるがままに自然に回帰する姿勢が感じられる。

四、終わりに

本稿では、まず『寒山詩』『唐詩選』と比較しながら良寛詩における中国古典の受容について考察した。その結果、良寛詩は『寒山詩』と同様、詩の形より詩の内面性に注目していることを論述した。また使用する詩句の傾向に着目し、『唐詩選』所収の杜甫や李白詩などに知見を持ち、それらを下地にしたと思われる点を指摘した。以上より良寛詩には、一定水準に及ぶ中国古典の受容が確かにあったことを明らかにした。

次に、中国で発生した隠逸思想をキーワードとして、まず中日の捉え方の違いから、日本的隠逸思想の性格に触れた。良寛の僧侶としての歩みも例外ではなく、この延長線上にある。以上の日本の隠逸思想の解釈を踏まえ、良寛詩の独自性の分析を試みた。紙幅の都合、最晩年の一作を取り上げるにとどまったが、政治的歩みの浮沈に左右され、あるいは夢破れても、なお大きな世界を語った中国詩人に対し、良寛の詩は、清濁を乗り越え、終焉期を語るにふさわしい、跡形もなくなるような静寂さを帯びていることに言及した。標題に掲げた独自性の説明は、緒に付いたばかり

で、晩年に差し掛かる他の詩についても今後瞥見したい。

今回の研究テーマ設定の動機は、良寛を通して江戸時代の文人像を探ることと、そこに内含される中国古典の影響の具体例を考察するねらいがあった。本稿の研究成果に基づき、良寛の他者との交流や合作について詩作と遺墨を鑑賞しながら、引き続き中日文化との接点に注目していきたい。

※良寛の漢詩は、基本的に内山知也、谷川敏朗、松本市壽編『定本 良寛全集 第一巻 詩集』（中央公論社、二〇〇六年）に掲載されたものを引用し、『定本・一・152』のように表記する。数字は作品番号のままに引用する。

『寒山詩』は、基本的に入谷仙介、松村昂著『禪の語録 13 寒山詩』（筑摩書房、一九七〇年）に掲載されたものを引用し、『寒山詩／拾得詩／豊干詩・二八一』のように表記する。数字は作品番号のままに引用する。

李白詩「峨眉山月歌」は、李攀竜編、前田直彬注解『唐詩選』（岩波書店、二〇〇〇年）に拠った。「臨路歌」は、詹鏗『李白全集校注彙釋集評三』（百花文藝出版社、一九九六年）に掲載されたものを引用し、『李白全集・三・二二三〇』のように表記する。数字は作品番号のままに引用する。

なお、引用する漢詩の訳文は諸版を参照しつつ筆者の言葉で表現した。

〔注〕

- (1) 鈴木文台「良寛禪師草堂集序並附言」『長善館学塾史料 上 漢詩集・漢詩文・書簡集』新潟委員会発行 一九七四年 五十八頁。原文は「師必可傳者有三、而道德不与焉、寒山拾得之詩、懷素高閑之書、師皆兼有之、而加以和歌不墜萬葉集之遺響」である。
- (2) (1) に同じ。五十八〜五十九頁。原文は「四聲之論、起於永明、定於梁陳之間、師尤所不喜、故師詩無之、押韻則不全用古韻、規則文選此當別論、勿以近世詩律之」である。
- (3) 東郷豊治『全釈良寛詩集』東京創元社 一九六二年 三〜四頁。
- (4) 飯田利行『良寛詩集譯』大法輪閣 一九六九年 三頁。
- (5) 渡辺秀英『良寛詩集』木耳社 一九七四年 三頁。
- (6) 内山知也、谷川敏朗、松本市壽『定本 良寛全集 第一卷 詩集』中央公論社 二〇〇六年 二十一頁。
- (7) 渡辺秀英解説『復刻 良寛墨跡』考古堂 一九八八年 五十三頁。
- (8) 宮栄二、小島正芳執筆『良寛没後五十年』新潟県美術博物館 一九八〇年 一七九頁。
- (9) 越佐文人研究会『良寛憧憬 その風土と周辺の人たち』成田山書道美術館・徳島県立文学書道館 二〇〇三年 二十六頁。
- (10) 東郷豊治『新修良寛』東京創元新社 一九七〇年 二四一頁。
- (11) 蔵雲「良寛道人略伝」「良寛道人遺稿」良寛の書研究会 一九三〇年 十頁。原文は、「貧道有所不嗜者三。曰詩人之詩。書家之書。庖人之饌此也」である。
- (12) (6) に同じ。二〇頁。
- (13) 七五五年から七六三年にかけて、唐の節度使の安祿山とその部下の史思明などによって引き起こされた大規模な反乱である。
- (14) 仇兆鰲『杜詩詳注』上海古籍出版社 一九九二年 二九六頁。原詩は「清江一曲抱村流、長夏江村事事幽」である。
- (15) 杜甫詩「飲中八仙歌」李攀竜編、前田直彬注解『唐詩選 上』岩波書店 二〇〇〇年 一二八〜一二九頁。
- (16) 鈴木牧之著、高橋実、荒木常能訳『現代語訳 北越雪譜』野島出版 一九九六年 三〇九頁。
- (17) (6) に同じ。五五五頁。
- (18) 川端康成『美しい日本の私―その序説』講談社 一九六九年 十三頁。
- (19) 唐木順三『日本詩人選 20 良寛』筑摩書房 一九七一年 二六一頁。
- (20) 新関公子『根源芸術家』春秋社 二〇一六年 一三〇頁。
- (21) 揖斐高『江戸の文人サロン 知識人と芸術家たち』吉川弘文館 二〇〇九年 四頁。
- (22) 班固撰『漢書』卷八十六「何武王嘉師丹傳第五十六」中華書局 一九六二年 三四八四頁。原文は「吏治行有茂異、民有隱逸」である。
- (23) 神楽岡昌俊『中国における隱逸思想の研究』ぺりかん社 一九九三年 一頁。
- (24) 田云明『僧侶と隱逸表現』『日本研究』四十七卷 二〇一三年 十一〜十二頁。なお、『懷風藻』は現存する日本最古の漢詩集で、近江朝(六六七〜六七二)から奈良時代中期までの詩約一二〇首を収めている。
- (25) (6) に同じ。三〇三頁。
- (26) 王琦『李太白集注』上海古籍出版社 一九九二年 四〇七頁。原文は「朗悟前後際、始知金仙妙。幸逢禪居人、酌玉坐相召」である。
- (27) (26) に同じ。

(28) (26) に同じ。五五七頁。

(29) 莊子著、森三樹三郎訳『莊子』中央公論新社 二〇〇一年 三頁を参照。

(30) (26) に同じ。二頁。

(31) (6) に同じ。三十四頁。

(32) (6) に同じ。四一一頁。

(33) (32) に同じ。

(34) 入谷仙介、松村昂著『禅の語録 13 寒山詩』筑摩書房 一九七〇年九頁。

(35) (34) に同じ。

主指導教員（岡村浩教授）、副指導教員（廣部俊也准教授・土屋太祐准教授）